

平成 24 年度金刀比羅宮例大祭の御神幸に参加して

第一コンサルタント 右城猛

まえがき

讃岐のこんぴらさん(金比羅宮)では、毎年 10 月 10 日、11 日に例大祭(れいたいさい)がある。そのメインイベントの御神幸(おみゆき)行列に火消筒持役で参加する幸運に恵まれた。

平成 18 年以来、正月には、こんぴらさんに参拝することを恒例にしている。しかし、例大祭の御神幸とはどういうものか何も知らないまま、馬場義幸・千津子夫妻のご厚意により参加させていただいた。

平成 17 年は私にとって最悪の年であった。1 月 12 日に父が心筋梗塞で突然他界した。その直後の 1 月 26 日には私が糖尿病で入院した。4 月には、ある専門誌に書いた私の記事に対して読者からクレームがあり、大きな問題になった。これまで順風満帆であった私に災いが次から次へと襲ってきた。

見放された運をなんとか引き戻したいと願って初詣をしたのが最初であった。この年から不運と思われることは起きなくなった。むしろ運に恵まれるようになった。

今年の 8 月、馬場夫妻が「よさこい鳴子踊り」の見物に来られた。奥様の千津子さんは家内の大学時代の友人という関係で、以前から親しくお付き合いさせていただいている。

馴染みの居酒屋で 4 人で食事をした。その席で、こんぴらさんの例大祭の話聞かせていただいた。行列の一員として是非加えていただきたいとお願いしていたのである。

準 備

金比羅宮の例大祭御幸神に参加する奉仕者は数百人いる。金比羅宮の近くに住んでおられる人々である。その内の 20 人のお世話を馬場家が代々務めている。義幸氏もお父上から世話人を引

き継いでいる。

今年は二人の欠員があり、そこに義幸氏の従兄弟になる斉藤博之氏と私が入らせていただけることになったのである。

10 日の夕方、馬場家に綾歌町岡田東地区の奉仕者 10 名が集まって、金比羅宮から借りてきているいる衣装に着替えた。



午後 6 時 30 分。馬場千津子さんの指導を得ながら平安時代の衣装に着替える。



奥様に手伝ってもらって着替える斉藤博之氏。

弱電関係の会社を定年退職後 5 年間嘱託として勤務していたがそれも今年終えたので、参加したとのこと。

非常に幅広い知識を持っておられ、知恵が働く人である。



世話人の馬場氏以外は、すべて白で構成された浄衣(じょうえ)。狩りや蹴鞠(けまり)など野外の遊び着として着る狩衣(かりぎぬ)と同じである。

純白の正装に着替えると、身も心も清められた気分になる。



午後7時、全員で記念撮影し、二台の車に分乗して馬場家を出発する。8時までに現地に集合しなければならないことになっていた。

おさがり(10月10日)

参道の石段を431段上ると、桜馬場西詰銅鳥居があり、その左側に広場がある。広場の中央には大きなクスノキ、奥には厩(うまや)と便所がある。

松明持役と火消筒持役は、本宮から降りてきた行列にここで合流することになっていた。

馬場氏らの出発点は、本宮なのでここからさらに354段上らなければならない。

毎年初詣に来ているので安易に考えていたが、わら草履で上るのは結構きつい。馬場氏の忠告に

従って軍足を二枚重ねて履いていたが、それでも鼻緒を挟む足が痛い。今思えば、鼻緒に白い布を巻いておくべきであった。

斉藤氏が持つ松明はこの広場に置かれていたが、私が持つ火消筒は、さらに46段上った社務所まで取りに行かなくてはならなかった。

この広場まで上ってきたときには汗だけで、しばらく汗がとまらなかった。しかし、椅子に腰を降ろして待機していると、風が吹くので寒さを覚えた。

夜の9時、予定通りご神体を乗せた御神輿(おみこし)が本宮を出発した。行列の先頭が私達のいる広場に到着したのは、9時20分であった。

御神幸(おみゆき)と呼ばれる行列は、奴(やつこ)組を先頭にして、乗馬の男頭人(おとことうにん)二人と駕籠の女頭人(おんなとうにん)二人を中心とした頭人行列、猿田彦、神馬(しんめ)、巫女(みこ)、伶人(れいじん)、御神輿(ごしんよ)、宮司(ぐうじ)以下神職、祭員など約500名で構成されている。

行列は、本宮から麓の神事場(じんじば)まで約2キロの道のりを3時間かけて進む。10日の御神幸を「おさがり」と呼ばれている。

平安絵巻さながらの光景は、素晴らしいようであるが、御神幸の一員として参加すると、自分がいる前後の様子しか分からないのが残念である。



行列の先頭に行く奴組(やつこぐみ)。行列に奴が加わるのは、表参道の石段が無くなって平坦になってから。



女頭人(おんなとうにん)。頭人とは、汚れのない童男・童女には神が宿るといふ古い信仰から、祭りの日に山の本宮から里の神事所まで、神様を先導して下りてくる子どものこと。



高張提灯(たかはりちょうちん)行列。観光協会、町議会、旅館組合、出雲分社、松山分社、尾張分社などと書かれた提灯が行列した。



高張提灯と塩湯(えんとう)所役の間で、斉藤博之さんが松明(たいまつ)を持つ役。

松明は、長さ 15cm ほどの松の木片約 20 個を、

長さ 1m、幅 1cm ほどの竹材で囲んで束ね、それを約 10cm 間隔に紐で縛って作られていた。

先の方から手元の方に燃えていくのであるが、束ねてある紐が燃えて切れると、火がついた木片が路面に落ちるのである。

その松明の破片が路上に落下したときに、竹筒の水をかけて火を消すのが私の役目。

この行事は、江戸初期の 1603 年に始められたようであるが、松明はそのときのままなのだろうか。手に持って歩くだけでは火が消えてしまう。四六時中振って、空気を送ってやらなければならない。そのため、結構腕が疲れるようである。

火消筒持役が一番楽だと思っていたが、翌日から腰痛に悩まされた。火を消す度にかがんだのが原因のようである。



天狗の面を被っているのは、天照大神の孫のニニギが、高天原から日本に降りる天孫降臨の際に、高天原から日本までを照らしたとされる猿田彦の神。



御旗(みはた)を担ぐかき人



太玉串(ふとたまぐし)。玉串とは、榊(さかき)の枝に紙垂(しで=紙を細長く切ったもの)をつけた神に捧げる供物のひとつ。太玉串は「立派な玉串」という意味。



ご神体が入った御神輿。一般には「おみこし」と呼んでいるが、「ごしんよ」と呼ぶのが正しい。



伶人(れいじん)行列。伶人とは雅楽を演奏する人。



錦蓋 (きんがい)。天皇が晴天時や雨天時に使用される笠。



楯(たて)持人を務める馬場幹王さん。馬場義幸さんの次男。



鞆橋(ウィキペディアによる)

御神輿は、琴平町を流れる金倉川に架かる鞆橋(さやばし)を渡る。銅ぶき、両妻唐破風(りょうづまからはふう)の屋根付橋である。金刀比羅

宮大祭の御神輿の渡御などの神事のときにのみ用いられ、通常は渡ることができない。

御神輿が鞘橋を渡るのは、「おくだり」のときだけ。「おのぼり」では通らない。御神輿が鞘橋を渡るときが圧巻。写真係の家内は鞘橋のことを知らなかった。行列が鞘橋を渡っている写真を撮って欲しかった。残念。しかし、考えて見ると小さなデジカメでは無理。離れているとフラッシュの光が届かない。

深夜の 11 時、御神輿が麓の神事場に到着。ここで着御祭（ちゃくごさい）が営まれ、「おさがり」が無事終わった。天気が心配だったが、9 時前に少し雨が降っただけであった。

馬場家に帰り着くと、0 時を回っていた。

おのぼり (10 月 11 日)

11 日は、神事場(じんじば)から出発する。

神事場には、御神幸に参加するたくさんの人々が集まって、記念写真を撮ったりして最後の夜を楽しんでいた。

今夜も私の役は火消筒持。松明(たいまつ)持役の斉藤博之氏の知り合いが、松明係であったことから、今夜は御神輿のすぐ前に入ることになった。松明持と火消筒持に取っては最高のポジションである。



出発前の神事場で、馬場義幸氏、斉藤博之氏と記念撮影。



今年の金比羅宮例大祭の主役の一人、男頭人の石田君。徳島市の方。頭人は最高額の寄付をした人の親族から選ばれる。一説には 2000 万円の寄付が必要とも言われている。石田家の金運にあやかりたいとの思いで一緒に写真に入ってもらった。



今年の女頭人の一人に、高知市の森田夏穂ちゃんが選ばれた。夜も遅いのでお疲れ気味。この光景は毎度のことのようである。

作家の藤本義一氏が 2003 年 7 月 13 日の四国新聞に、「二度目の時に男女二人の子供たち頭人さんを取材しようとしたら、二人ともすやすやと眠っていた。子供たちの無邪気な寝顔、安らかな息遣いに自然の大らかさが見られ、起こして質問する必要はなにもなく、その寝顔だけが十二分にコンピラサンの全てを語り尽くしているように思えた。他の祭事には見られない微笑ましい情景だった記憶がある。」と述べられている。



男頭人に選ばれた徳島市の石田君の親族。

行列は、かごに乗った女頭人、その親族、神馬に乗った男頭人、その親族、かごに乗った女頭人、その親族、神馬に乗った男頭人、その親族と続く。



もう一組の男頭人と女頭人は、徳島県阿南市の萩野兄妹。



男頭人の親族の後から、金の文字が書かれた「社紋高張提灯」を持つ綾歌町岡田東の三浦一之氏と谷本和也氏。



猿田彦の後に続く道太鼓(みちだいこ)



琴箱に続くのは巫女の列



御神輿の前に二組、後ろに二組の松明持と火消筒持が付く。斉藤氏と私は前の右側の位置。最高のポジション。



私達の後を武者姿の男衆に担がれた御神輿が続く。



青色の浄衣を着て、「宮司輿」(ぐうじこし)の後を歩く若党(わかとう)役の馬場義幸氏。

写真に神馬(しんめ)が撮られていないのは、神馬に向けてはフラッシュが禁止されているためである。

平安絵巻さながらの御神輿の渡御(とぎょ)の歴史は古く、江戸時代以前から今に続いているといわれている。

以前は、深夜にもかかわらず数万人の参拝者・見物客が沿道を埋め尽くしていたようであるが、最近は少なくなっている。特に、二日目の「おのぼり」は少ない。

時間帯が遅いのも人出が少ない大きな原因のように感じた。さりとて昼間にすれば、御神幸に参加する人を集めるのが難しくなる。皆さん昼間は仕事を持っている。

表参道の階段の登り口まで来ると、松明は回収される。後は、石段を477段上って社務所まで行き、そこで火消竹筒と着ている衣装を脱いで返却すれば私たちの役目は全て終了である。



馬場夫妻に「骨付き鳥 一鶴」で昼食をご馳走になる。

あとがき

私は、何事にも当事者意識を持つことをモットーとしている。今回はまさしく当事者として行動できた。傍観者では味わうことができない満足感が得られた。改善すべきと思われる御神幸の問題点もたくさん見えた。何よりも大きな成果は、「こんびらさん」がとても身近に感じられるようになったことである。きっと、御利益も大きくなるに違いない。

このような貴重な体験ができたのは、馬場義幸・千津子夫妻、そして馬場家の皆様のお陰である。心より感謝申し上げます。

(2012年10月12日記)